

「六十歳にして、作家をめざす：されど、道は険しい」は、平成十九年六月二日第十三回の工学部同窓会(悠久会)埼玉支部総会の席上、支部役員から私に与えられた講演タイトルである。私が工学部卒でありながら、何故この年で物書きをめざすのか？経緯や動機について会員の前で講演して欲しいとの要請だった。

その時の講演趣旨を補足して再録する。

平成十三年一月会社定年となり、趣味のダンスのホームページ(H.P.)を立ち上げた。遅れて小説のH.P.を開設。何故立ち上げたかは後述する。現在小説H.P.に短編・長編合わせて二十二編の小説と五十数編の随想録が掲載されており、ダンスH.P.に駄句(俳句・短歌)が並んでいる。定年前に信州某俳句結社に所属したが、ダンスを句材として詠む私の叙情的俳句と結社長老と意見相容れず、己の未熟と素質無さを棚に上げ「男子の本懐小説にあり、俳句にあらず」と規するところあって二年で退会した。

家内のダンスの友人に、詩人サトウハチロウの四郎氏の奥様がいた。家内も私も、当初その奥様が、佐藤家の係累だと知っていた訳ではない。やがて、親しくなつて文京区本郷弥生町にある「サトウハチロウ記念館」に案内されて何度か足を運んだ。昭和十二年、佐藤家に四郎誕生で、八チロウが東大病院に近い弥生町に移り住み、昭和四十八年七十歳で亡くなるまでここで三十七年間暮らした自宅である。

弥生町の記念館は、今や奥様の郷里岩手県北上市展勝地公園内に平成八年移設され新観光名

所になった。初代館長が八チロウの妻房枝さんで、北上市展勝地公園移転後の二代目館長が四郎氏である。奥様とは縁あって親しく交際させて戴き、北上市教育委員会主催のサトウハチロウ記念館落成式典に友人として家内と参加した。八チロウ異母妹として式典列席し、当時文春に大河小説「血脈」連載中の小説家佐藤愛子さんと一緒に撮つた写真が、私の小説のH.P.のトツブ頁を飾っている。

佐藤家の人々とのこうした出会いも、私を小説執筆に向かわせた動機のひとつである。

次に別の執筆動機を詳しく述べたい。平成十四年十二月、九十三歳で逝つた母の七忌が終わり、部屋の遺品を整理していた時のことである。偶然押入れの上にある天袋戸棚を覗くと、その奥から変色したダンボール箱が一つ出てきた。それは、少年期から青年期の私が書き溜めた創作ノート・手紙類・原稿の束そして同人誌等である。

亡母の部屋の押入れ天袋戸棚に、何故古い創作ノートや原稿束が保管されていたのか？今でも自問したことが忘れられない。

途切れた記憶の糸を手繰り寄せながら、結び直す作業にそれは似ていた。父は確かにしがなしい工業高校教員だが蔵前出(現東京工業大)の男。その息子が詩・小説にうつつをぬかし、己の使命を忘れるとは何たる軟弱さと明治女の気骨をみせて母から叱責受けた記憶がある。

私の文学歴は、高校二年の時一年間病気休学したことに遡る。無聊を慰めるため原稿用紙の升目をうめて過ごした。多感な仲間と、「えぞうぶ(ハインツプ)」という同人誌を創刊する。自宅は、松本の文化村と呼ばれる場所にあり、近

隣に医師・大学教授、画家・彫刻家、詩人・作家・写真家いわゆる松本の文化人を自称する人々が住む澤村だった。高校同窓のポプリ研究家でエッセイスト、熊井明子(旧姓井口明子) 映画監督熊井啓夫人)も住人の一人だった。

大学二年悠久寮入寮時代の昭和三十七年、高校時代執筆の作品を下敷きにして長岡の雪体験を基に、京都大学新聞社の懸賞小説募集に「雪」という作品で応募した。因みに翌年私は、長岡で通称三八豪雪に遭遇する。

当時、文学賞が少なかった時代である。

全国大学生を対象にした京大新聞社のこの賞は、作家を目指す文学青年の憧れであった。何故なら選者に、芥川賞選考委員の伊藤整、野間宏の二名が名を連ね、入選者の中から何人かが作家デビューしていたからである。

この年何と！私の「雪」が入選した。今でも選者の選考評を読み返すと心が躍る。

軟弱で慢心気味の私は、在学中は特に大学卒業し入社後も、「東京に出てこい！」との高校同窓の作家志望の友人の誘いに早く応えなかった。会社の寮に戻ると作家を夢見て、松本の同人雑誌と関わり創作活動に励んだ。

「おまえは自分を忘れていた。無名作家を我社の高崎研究所に入れた覚えはないぞ！」

一連の創作活動が会社に露見し、私を買って入社させた研究所役員から一喝を食らう。役員は偶々父の蔵前時代の友人であった。工学部応用化学科卒の私に期待されていたものは、そうした執筆活動でないことは自明の理で、前述の母の叱責に繋がるのである。

二十六歳の研究所勤務の私は、父友人の役員の手前小説執筆を封印した。定年までの三十余

年間、本社勤めの間も絶筆を続けた。でも憂さをはらすかのように、対外的な専門領域の執筆・講演活動に意欲的だった。日本能率協会や学・協会、商工会議所の執筆・講演依頼を受けた。論文は、国民経済研究所の産業動向誌、化学経済研究所化学経済誌、日刊工業、工業調査会等の化学系専門誌に掲載され読者を惹きつけた。オーム社のMOL誌の社外編集委員も勤めた。

国の調査研究に携わる転機がきた。

昭和五十八年から六十年までの三年間、(財)先端加工機械技術振興協会(理事長・岡崎嘉平太)「先端技術の解析評価計測検査に関する調査報告書」の研究委託であった。和光市理化学研究所にも出入りし、後の日本のロボットの先端的研究者や自在研究所の森政弘、京大工学部沖野教郎、東大工学部長(吉川弘之)、都立大工学部長(古川勇二)と講演会や調査研究で接触したのもこの頃である。

平成六年、(社)研究産業協会が毎年実施の(会長・飯田康太郎)、「我国無名の独創的先達」の一人に囚らずも私が選出されるという栄誉を得た。この企画は、後にNHKプロジェクトXの基になったと聞いている。現在でも経済産業省の仕事を手伝っているが、前述の国の調査研究が端緒になったものと理解している。

かように私は、物書きの道を諦め企業研究開発者として専門領域で生きたけれど、決して人生を悔いてはいない。上司謹責で創作活動封印後、すねて生きていたわけでもない。

反抗期の少年が父に反発するのは当然である。将来の進路面で父との確執は絶えず、某私大文学部を切望したが、父の失職で一家赤貧に陥り私大を諦め志望を国立校工学部に変更後も、つ

い弾みで「在学中の仕送りは一切いらぬ！」と啖呵を切ったあの頃。その父も昭和五十四年十二月八十歳で他界した。

母の遺品整理を契機に、四十年前の遺物として封印したはずのあの悔しい痕跡が裡に芽生え、母の無言の愛を感じることなく反発した禍根の感情、このまま埋もれるのかという狼狽だった。母は私の青臭い野心を察し、未知の才能を盲信して天袋戸棚に原稿束を内緒で隠したのか、今となつては聞く術もない。

もしあの時、天袋戸棚に原稿束を発見し得なかつたなら、自堕落な余生に安住し昔の夢を追う物書きを決断していないに違いない。

平成十五年二月、「たなか踏墓の小説の部屋」HP開設は、母が逝ってから二カ月後である。今では物書きに専念できる環境整備のため、独自ドメインを確保、HP専用サーバー上に作品を発表し続け管理運営している。

HP上に「奇妙な」シリーズという作品群がある。本年一月の前著に続き、十月幻冬舎ルネッサンスから上梓の『奇妙な羽衣伝説』は第六弾といふべきであるが、出版は四冊目を数えることになる。ある溺死体が湖に漂う。絹産業の歴史の間を紐解き裏に蠢く国際的謀略と、絹の魔力にとり憑かれた者達の波乱の運命を描くハードカバー版長編ミステリーである。

幸い前著『奇妙な受精卵』が全国図書館司書の方々の関心を呼び、ミステリーというより現代医学のホラー小説として評判で、印税が増える結果となった。苦境の出版界にあつて、拙本を紀伊国屋系列書店(ネット)で全国配本する幻冬舎に感謝しなければ罰が当たる。

日本の出版文化は今大きな曲がり角にあると

いう。各地で出版社や本屋倒産の知らせを聞く。私の作品を当初から評価し、最も販売支援してくれた明治二十三年創業の松本一番の老舗書店の鶴林堂も本年二月に自己破産した。

果たして、今後物書きとして成功するかどうかは全く未知数である。いや六十歳の物書きの前途は決して明るくない。文学賞に挑戦するに余力に遅すぎるし、応募した作品を読まないで、年齢で没にしたと聞くや怒りも沸いたが、彼らの背景は逆に理解同情できる。

『奇妙な羽衣伝説』では、幻冬舎ルネッサンスのプロの校閲・校正担当者の洗礼を受けた。六百六十枚相当の原稿が、付箋付で真っ赤になつて戻されたからである。プロ作家でも必ず一度はこうした目にあうと聞いたことがある。版元からの初校原稿に、一週間掛けて赤を入れ校了として戻した。校了枚数は六十枚程減つていた。作品には念入りな取材調査で、ノン・フィクションの匂いがあると自負してきた。長年の技術屋のキャリアがそうさせており、どちらかといえば読者は情感好みの女性より、理詰めの男性ファンに多い。この度の洗礼を、幻冬舎の脱皮のための激励の試練と受け止めた。

朝のラジオ体操やスポーツ倶楽部の水泳に精を出し、体力温存を図るべく悪戦苦闘しながら年に一作でも二作でも脳トレの積りで、作品執筆できたならと願う。でも、六十歳の駆け出し作家がいても良いじゃないかと最近開き直っている。この年で青臭い昔の夢を探し求めるのは些か滑稽だが、何とか生きた証を活字にして残していきたい。今日もまた何時もの如く未明三時に起床し、パソコンに向かいキイを叩いて構想を練る私がいる。